



『オルフェウス』リハーサル中のノイマイヤーとボツレ 写真: Holger Badekow

ミラノ・スカラ座のロベルト・ボツレといえば、世界中のバレエ団に客演して数えきれないほどの役を踊ってきたスター・ダンサーです。その彼のために作られた役がこれまでなかったのは、意外といわざるをえません。そこに現れたのがハンブルク・バレエ芸術監督のジョン・ノイマイヤーでした。目下ボツレのために『オルフェウス』を創作中です。「この作品をボツレのために作る用意は、常にありました。」ノイマイヤーは語ります。「それでもなお、創造を始めるためにはオルフェウスとは誰なのか、そしてこの物語の様々な異本のうちどれをバレエの構成の根幹に据えるのかを、明確にしなくてはならなかった——つまり、私自身が物語を自然に思い描けるようになる必要があったのです。振付に着手したのは、実際にロベルトと仕事をするようになってからです。私にとってこの物語の中で最も重要なのは、神から与えられた才能、すなわち天職を持つ人物が、同時に一人の人間であったという、その組み合わせの妙なのです。」

一方ボツレは、こう語ります。「僕はすごく神経質になっていました。九月に振付を始めた頃には特に。全幕バレエで、大きな役ですからね。確かにジョンとは『椿姫』で仕事をしたことがあったけど、新作は初めて。だから、まず仕事のやり方を見つけなくてはいけなかった。最初の週は、二人ともちょっと神経質でしたよ！何か重要なプロジェクトが企画されても、初めての相手と組むのだったら、どんな風に進んでいくか分からないでしょう。だからちょっと緊張していたんだ。でもジョンは最初の週の終わる頃にはとても満足してくれて、考え方を共有していると感じられるようになっていました。」

「自分の中にも、何かエモーショナルなものを発見できた気がします。ジョンは、ダンサーのあらゆる特徴や身体能力を見抜く、すぐれた芸術家です。そんな振付家と仕事をしてみて、僕は自分が日々成長していると感じました。彼は僕からもっと多くを得ることができるようになり、僕は彼により多くを与えることができるようになる——ほんとうに特別なことでしたね。』『オルフェウス』は、十二月にハンブルクで世界初演の予定です。」

ロンドンでは、ロイヤル・バレエがトリプル・ビルを上演しました。そのうち、ウェイン・マグレガー振付の『リメン』は、今シーズンに初演される新作第一号です。マグレガーによれば、このバレエは「liminality、すなわち光と闇、存在と不在、生と死の境界という理念から、着想した」とのこと。確かに『クロマ』や『インフラ』同様、彼は今回もダンサーたちを身体能力の限界まで踊らせていますが——百八十度を超える手加減なしの開脚、拷問のようにねじ曲がった胴のポジション——、そこに込められた心理的なメッセージは、簡素ではあるのに伝わりにくいものでし

## 12月号の主な記事 ——ハンブルク、ロンドンより

サラ・ラムとエリック・アンダーウッド  
『リメン』より 写真: Bill Cooper



た。『リメン』からは、感情がとことん排除されていたため、私たちは、フィンランドの作曲家カイヤ・サーリアホの荒涼としたチェロ協奏曲『光についての備忘録』に乗せて繰り返される非人間的でロボットのような動きを、見つめつづけるしかなかったのです。

マグレガーの複雑な作舞を包み隠したともいえるのが、宮島達男による装置と映像でした。オープニングの部分では、半透明のスクリーンセーバーを思わせる紗幕の上で、いくつもの数字がダンサーの身体の上をあてどなく泳ぎ、商業主義的な雰囲気青の青いライトがまず目を全部埋めるまで次々と点灯してゆく様子は、数独を連想させました。衣装はモリッツ・ユング。けばけばしい色彩のトップスをダンサーたちが途中で脱ぎ捨てると、その先は全員がかわりばえのしない肌色一色でした。

キャストは、マグレガー作品にこれまでも出演してきた常連のリヤーン・ベンジャミン、サラ・ラム、エリック・アンダーウッド、エドワード・ワトソンに、初めて彼の振付を踊るブラジル出身のレイシア・ストック(ロイヤル・バレエ学校を卒業し今シーズン入団したばかり)らを加えた、女性八人男性七人。全員が奇跡のような柔軟性を示し、流動的な造形を嬉々としてこなします。マグレガー一流の一種異様な四肢の用い方は、ロイヤル・オペラハウスで『クロマ』が初演され成功を収めたときには衝撃的でした。ダンサーたちが新たな方向へと能力を伸ばしたことに私たちも賞賛を贈ったものですが、その魔力ももはや色褪せた感があります。異論はあるでしょうが、『リメン』でもっとも心に残ったのは、透けるような白い肌をしたボストン生まれのプリンシパルのサラ・ラムと、褐色の肌のワシントン生まれのソリスト、エリック・アンダーウッドという二人のアメリカ人ダンサーでした。

同時に上演されたのは、ジョージ・バランシンの『アゴン』再演と、グレン・テトリ振付の『スフィンクス』。限られた予算の中でロイヤル・バレエが買ったのがなぜ後者だったのかについては、疑問を呈さざるをえません。確かにかつてはイングリッシュ・ナショナル・バレエの主要レパートリーだった名作ですが、今では三十二年前の初演というよりはるかに古くさく見えます。非情なスフィンクスを演じたマリアネラ・ヌニェスは印象的でしたが、オイディプス役のルパート・ペニファーザーとの間に電流が走らず、彼の方も巧みに踊ってはいたものの官能的な魅力に欠きました。山犬の頭をしたアスビスも、あの気の毒な衣装では、それがエドワード・ワトソンだと分からないほど。作品としての質が残念だっただけでなく、出演者がわずか三人というのも、大所帯のこのバレエ団向きとはいえません。